



# 死後2週間経って発見された 父親の悲劇

遺品整理事業を手がける「キーパーズ」の吉田太一社長もまた、「孤独死の多くは、実は働き盛りの中高年であ



キーパーズ  
代表取締役  
吉田太一さん

## “遺品整理屋”が見た 現代家族の肖像

2002年、日本初の遺品整理業専門の企業「キーパーズ」を創業。その現場を描く自社ブログをまとめた『遺品整理屋は見た!』(扶桑社)がベストセラーとなり一躍、時の人に。孤独死予防の啓発DVD(無料配布)なども企画。「これまでの経験や人脈をもとに、孤独死を減らす活動を始めたい。それが本業の仕事が減らす結果であっても(笑)」。

キーパーズHP <http://www.keepers.jp/>

る」という。

単身世帯の遺品整理を遺族や大家から依頼されることが多いが、その半数が孤独死のケース。それも「高度経済成長を支えてきた団塊世代に孤独死が増えている」と言う。

「団塊世代の勝ち組はほんの一握り。多くは社会の急激な変化についていけず職を失い、暮らしは荒れて引きこもり状態になるが、まわりの人はまだまだ元気な年齢と油断するんです。それが孤独死の序奏になる」(吉田さん)。

確かに65歳以上の高齢者の場合、本人も親族も行政も健康状態に気を配るのに比べ、50代ではあまり関心を払わない。妻子や親兄弟が健在だとますます「孤独」とは結びつきにくい。

思うに、本当に天涯孤独な人は孤独に慣れていて用心深く生活するから、

むしろ孤独死はしないのではないかと？

この点は吉田さんも同意見で、そのような人はあてにするものがないと常に意識しているので孤独死にはならないだろうと。資産の多寡もさほど関係ないようだ。

「むしろ、天涯孤独ではないのに孤独死する人が多いということが問題なんです。同じアパートの3階に父親が、4階に息子が住み、息子はお父さんが住んでいる部屋の前を毎日通っていたのに、腐臭が漂うまで死後2週間、気がつかなかった。そこで暮らしていること自体を忘れていたような感じなんです」。

遺品整理事業が広がる背景には何があるのか……。そこにあつたのは、経済的な貧困ではなく、精神の貧困だった。